
近世イギリスにおける権力と儀礼

—the Triumph of Honour に見る

チューダー王朝の君主政理念—

井内 太郎

はじめに

本稿は1501年にイングランドの皇太子アーサーとスペイン（アラゴン王国）の王女キャサリンとの結婚式に先立って行われたキャサリンのロンドン入式を取り上げ、そこから読みとれるチューダー王朝の君主政理念を明らかにすることを目的としている。チューダー王朝は1485年にヘンリ七世により開祖されたものの、当時さまざまな問題を抱えていた。同王家自体が傍系であり王位継承の正統性の問題を抱えていたし、国内の政情も必ずしも安定した状況にはなく、また国際的に見てもイングランドはいまだ二流国のままであった。その意味で当時の強国スペインと結婚政策を通じて政治的関係を強化することは、敵対国フランスに対抗するために必要な措置であったし、また国内外に王権の正統性や王国としての威信を誇示する絶好の機会でもあった。したがって、国王政府がこの結婚式の際に国内外の要人をロ

ンドンへ招待し、厳かなロンドン入市式、宮廷内での盛大な祝宴、馬上槍試合など一大イベントを挙行したことの意味も、単なる祝祭以上の重要な政治文化的意味を持っていたのである。

さて、このロンドン入市式を巡って、古くはW. ウィッカムをはじめとする演劇史家により、そのページェントを16世紀における演劇の発展過程の中で位置づける試みが為されてきた。その後、E. カントロヴィッチやF. イエイツ、R. ストロングらの仕事を契機として、そこに王権の表象、王権の象徴性を見出そうとする研究が現れてくる。また最近では王権と都市の関係に注目し、この入市式の準備に主体的に関わった都市側の側が、入市式をいかに捉え、どう我がのものとして利用しようとしていたのかを分析する研究も現れてきつつある。もちろん、これらの研究視角は相互に関連性を持つものであるが、紙幅が限られているので、おもに第2の視点、すなわちロンドン入市式に見られる王権の象徴性の問題を検討しながら、そこからテューダー王朝の君主政理念を読みとってみたい。

I 国王のロンドン入市式

まず国王にとって入市式の持つ意味について簡単に確認しておこう。入市式とは国家儀礼の一つであり、戴冠式や葬送儀礼などと同様に重要な儀式であり、ページェントを伴う盛大な式典であった。元来は王の都市入場に際して行われたが、それだけではなく、王族の結婚式や凱旋の際にも執り行われた。入市式そのものは、まず1189年のリチャード一世の戴冠の際に行われたと言われているが、ページェントを伴う入市式を史料的に確認できるのは、1377年にリチャード二世の戴冠の際に行われた入市式と言われている。入市式の費用は基本的に都市側が負担し、また各ページェントのモチーフも都市の側で考案された。ページェントは一カ所で一つの舞台で行われるのではなかった。たとえばロンドンにおける入市式の場合、王の入場の開始地点のロンドン橋からセント・ポール大聖堂までの市内の目抜き通りの沿道の各所に舞台が設置され、それぞれの演劇内容が相互に関連性を持つ一つのストーリーとなっており、国王がセント・ポールに達したところでクライ

マックスを迎える構成となっていた。また舞台が設置される場所も、基本的にコンディットやスタンダードと呼ばれる給水施設であった。もちろんこれらの地点は、普段から人々が集まり賑わいをみせる場所であるが、特にチープサイド界隈は多くのカンパニーの店舗がひしめき合う商業中心地であり、都市の威信を象徴する場所であったと言われている。

では次にTriumph of Honourと呼ばれる形式の入市式についての基本的な説明から始めよう。これは1501年11月13日にスペイン王女キャサリンが、イングランドの皇太子アーサーと結婚するためにロンドンにやって来たおりに、ロンドン市で挙行された入市式のことである。したがって、これはroyal entry といってよいものであるが、ここでは当時Triumph という概念が意図的に用いられたことに、まず注目しておきたい。すなわち、この式典は古代ローマの將軍の凱旋式を模したものであり、伝統的な王の入市式(royal entry)と古代形式の融合を意味している。ロンドン橋に始まってセント・ポールで終わる凱旋コースの設定自体、古代ローマ帝国における凱旋コース、すなわち市壁外のマルスの野から始まってカピトリーウムで終わり、最後にユピテル神殿の前へ到達するコースを彷彿させる。ロンドン市民は、このページェントの中にカエサル以来の祝典形式がそこに根付いていることを見て取ったのである。凱旋入市式の意義の一つは、そこに明らかにルネサンスの文化的影響、すなわち非キリスト教的、古代的要素を見て取ることができる点にある。

II キャサリンの凱旋入市式の構成

1 史料の検討

キャサリンとアーサーの結婚式に関する公式な史料は、College of Arms, MS Ist M.13 (以下M.13略記)の中に収録されており、実物は英国紋章院に所蔵されている。同史料は四つのパートからなり、Part I 国王評議会による婚儀の計画書 (fols 1-14), Part II 空白部分 (fols 15-26), Part III アーサーとキャサリンの婚儀に関わる記述 (fols 27-75), Part IV ヘンリ七世の娘マーガレット王女がスコットランドの王家へ嫁ぐ道中に関する記述 (fols 76-117)

からなっている。当初これらのマニュスクリプトは別個に存在していたが、16世紀後半に一卷にまとめられフォリオナンバーが付された。その後、紋章官の所有物として代々受け継がれ、最終的には17世紀に英国紋章院の資料室へ保管され現在に至っている。

さて、では M.13の PartII 婚儀に関わる部分の具体的な検討に入ることにしよう。この部分の構成についてみると、Prologue (fol.27-28) と Book I~V から構成されており、BookI がキャサリンがスペインを出帆してロンドンに入るまで、BookII がロンドン市での凱旋入市式の記述、BookIII がセント・ポールにおける婚儀の様子、BookIV はその後に行われた馬上槍試合と宮廷内で行われた仮装祝典の様子、BookV がアーサーの死と葬儀に関わる内容となっている。したがって、われわれがまず注目せねばならないのは、BookII の記述ということになる。BookII の全体的な構成とその特徴から見てみよう。

第1にキャサリンがロンドンブリッジから出発して最終地点であるセント・ポールに到着するまでに、6カ所の舞台にページェントが用意されており、それぞれにテーマが設定されていた。すなわち P1 が Saint Katharine と St. Ursula によるキャサリン出迎えの場、P2 が地上における the Castle of Policy の場、P3 が月の領域の場、P4 が太陽の領域の場、P5 が主の御座の場、P6 が名誉の御座の場であった。ここからも推察できるように、キャサリンは行列を伴って各ページェントを厳かに進んで行き、最終的に「名誉」によって迎えられるという構成になっており、そのことが、この入市式をして Triumph of Honour と称される由縁ともなっている。もちろん入市式において挙行されるページェント自体は、イングランドの各都市でも広く行われていた。しかしながら、16世紀に入るとヨーク、チェスター、コヴェントリなどの地方都市では依然として伝統的な聖史劇が演じられていたのに対して、ロンドン市では凱旋形式の入市式 (civic triumph) が発展していくこととなる。凱旋形式の入市式の起源をたどると、14世紀末のイタリアに辿り着く。この頃すでにイタリアでは、古代ローマの凱旋式を高く評価する動きが展開されていた。まず、人文主義者たちが、

これに関する重要なテキストを再発見し、出版していった。たとえば、リウィウス『ローマ史』の第30書はその代表的な作品となっている。その後の影響力という点からすれば、ペトラルカの文学作品も忘れてはなるまい。彼の『アフリカ』はスキピオ・アフリカヌスの凱旋式について言及しており、またその後彼が著した詩の題は、そのものずばり『凱旋』であった。このように凱旋式が人文主義者たちにより高く評価され普及していくと、勝利を飾った傭兵隊長や統治者たちは、次第に自らの権威を高めるために、これを積極的に利用するようになる。1443年にアルフォンソ王は、ナポリ入場に際して城壁に開けられた穴を通して、真に古代風の荘厳な凱旋入場を挙行した。またイタリア戦争さなかの1509年に、フランス王ルイ12世がクレモナ入場に際して、壮麗な凱旋門をくぐり抜けたが、この時の凱旋式の準備にはレオナルド・ダ・ヴィンチが関わっていたとも言われている。こうして15世紀末までには、イタリアにおける政治的指導者の入市式は、完全に古代ローマ風の凱旋形式に転換した。その後この凱旋形式の入市式は、ロンドンのみならず当時の北西ヨーロッパの主要都市で流行し、パリ、ブルージュ、アントウェルペンなどでも確認されている。

第二に、ロンドン市内のストリートに六つのページェントが設定されたことにより、一時的にはあれロンドン市内全体を一つの劇場とみても、地上界、月、太陽、天界という大宇宙が人々の眼前に展開することになった。キプリングという研究者によれば、このように中世の幻想的な世界を視覚的に表現したページェントの形式は、かつてロンドン市で行われたページェントには見られない特徴であった (G. Kipling, *The Triumph of Honour*, The Hague, 1977)。

第3に各ページェントにおいて演じられる劇について見ると、各ページェントを物語形式で展開しながら、テーマの一貫性を持たせた最初のものであった。またこの演劇の主役である凱旋者 (Triumph) は、もはや各ページェントの単なる受け身の傍観者ではなかった。すなわち中世のページェントに見られたように統治者が身につけるべき美德を単に表現する訓戒的なものではなく、凱旋者個人

をページントの主役に据え、彼の個人的な栄光を讃える構成となっているのである。キャサリンは各ページントの主役として登場し、それらを通過していくことでイングランドの王妃たるに相応しい枢要徳を身につけていき、最後に名誉の御座に迎え入れられ、彼女の栄光が讃えられたのである。

2 凱旋入市のプロセス

では、名誉の御座に至るまでの過程を順を追って、簡単に整理してみよう。キャサリンの凱旋入市の行列に加わったのは、聖界からはヨーク大司教、ならびにヨークの司教、ヨークの Dean ほかの高位聖職者、俗界からはヨーク公、バッキンガム公、ノーサumberland 伯、サリー伯、エセックス伯、ケント伯のほか、多くの貴族やナイト、エスクワイアなどそうそうたるメンバーであった。まず P1 でキャサリンら一行を出迎えたのは、天界から降臨した St. Katharine と St. Ursula である。そもそもスペイン王女キャサリン（カタリナ）の名前は、彼女の曾祖母 Katharine of Lancaster からもらったものであった。一方、St. Ursula は小熊座（Minor Ursa）に住んでおり、当時のイングランドでは British Saint として知られ、アーサー王は彼女の血統を受け継ぐ王とされていた。したがって、ここではまず、キャサリンとイングランドが血縁的に二重の結びつきを持つ点が暗示されている。St. Ursula は将来キャサリンが第二の Ursula となることを予示して、the Castle of Policy へ向かうように勧める。P2 ではキャサリンはスペインの星、ヘスペルス（Hesperus、宵の明星）の月明かりに導かれて the Castle of Policy に達した。そしてヘスペルスの放つ神々しい光の神秘的力によって城門が開かれた。驚いて出てきた Policy は、キャサリンを見て Commonweal を治めるのに必要な Virtue と Noblesse の片鱗を認め、城の中にいる Virtue と Noblesse のもとへ導いた。そこでキャサリンは、Noblesse と Virtue の導きなしには Honour に到達することはできないことを告げられる。P3 では天使ラファエロ、カスティーリアの賢王にして天文学者のアルフォンソ王、予言者ヨブ、哲学者ボエチウスがそれぞれ、キャサリンに語りかけた。P4 は

太陽の領域であり、このページントの正面に大きなホイールが設置され、その中に3人の騎士姿の男が入ってこのホイールを回していた。そのホイールの中央にアーサーを乗せたシャリオット（四つの星＝四輪の凱旋戦車）が取り付けられていた。イングランドでは古くから大熊座（Ursa Major）はアークトゥルス（Arcturus）と同一視されており、主星の北斗七星は Arthur's Wain と呼ばれていた。もちろんアーサー王は、皇太子アーサーと同一視されており、彼はアークトゥルスを自らの星座としながら、四つの星からなる車輪と三つの星からなる馬から構成される黄金のシャリオットに乗って太陽の領域を駆けめぐっていたのである。宵の明星（Hesperus）であるキャサリンは太陽の領域に入ると輝きを失っていくが、アーサーと邂逅したことで息を吹き返し、アーサーとともに Honour の御座を目指して天空を駆け上っていくことになる。P5 では、中央に多くの黄金の蠟燭に囲まれた御座があり、そこにいとも荘厳な神が座していた。これらの蠟燭はカトリック教会を象徴しており、信仰・賢明・教義・恩寵の光で神の顔を照らし出していた。神はキャサリンを自分に似せて創造したこと、またわが教会で結婚し、いずれ彼女の高貴なる子供たちが王国を統治することになることを告げ、彼女を祝福する。そして美德を修得した報償として、Honour の御座に進むように告げられる。そして最終場面の P6 に入っていく。舞台の側面にはベアの大きな階段が設置されており、階段を昇った所に七つの徳（キリスト教の神学的徳 Faith, Hope, Charity とギリシア哲学の四元徳 Justice, Prudence, Temperance, Fortitude）が立っていた。さらに彼らの上部に三つの席が用意されていた。中央の席には Honour がすでに座しており、彼の横の二つの席を見ると、クッションの上に王杓と金の王冠が置かれていた。もちろんこれらの席はキャサリンとアーサーのために用意されたものであった。Honour はキャサリンに対しておおよそ次のように語りかける。あらゆる人々が Honour の座を求めてやってくるが、多くの場合、徒労に終わってしまう。なぜなら、その道中の各段階に住まう美德を身につけることなくして、名誉の玉座までたどり着くことはできない

からである。その上で、秀でた花婿を伴う高貴なる王女、汝はわれら (Virtue and Honour) と共に、ここで統治し王国に永久の繁栄をもたらすことになるであろう。ここにある玉座と王冠は、Noblesse と Virtue を修得した汝らに対する報償として用意されたものであると告げる。こうしてすべてのページメントを通過したキャサリンはセント・ポールの the Church Yard の中に入り、そこで婚儀が厳かに執り行われたのである。

III The Triumph of Honour の 四つの構成要素とその意味

凱旋入市式は内容的にみると、およそ以下のように概念化することも可能であろう。アーサーとキャサリンの結婚、それに伴うイングランドとスペインの政治的同盟関係という歴史的事実を横軸とすれば、縦軸として少なくとも四つのアレゴリカルな要素 Triumph, Astronomy, Scripture, Honour がそれらの事実を網の目状に覆う形で成立していた。

まず第1の Triumph の要素についてであるが、当時のロンドン市民は、こうした形式の凱旋がカエサル時代まで遡る古代ローマ帝国における祝祭形式であるということをはっきりと認識していたということである。たとえば、15世紀半ばの人文主義者リリイ (W.Lilly) は、ヘンリ五世がアジャンクールでの大勝利をひきあげてロンドン市へ凱旋入場した模様を、ポンペイウスやスキピオのそれに例えていることが、そのよい例である。しかし、古代ローマの凱旋式が単に再現されたわけではなく、中世キリスト教的ないしはルネサンス的な要素が、そこに組み込まれていた点にも注意しておきたい。中世後期イングランドにおいて、古代ローマの凱旋式をテーマとした道徳的あるいはアレゴリカルな書物の多くは、ペトルカカの詩『凱旋 (Trionfi)』をモデルにしていたと言われている。そこに共通する認識とは、凱旋者はアレゴリカルないくつかのステージを進んでいくわけであるが、その際に、用意された美德 (主に七枢要徳) を修得した上で、次のステージへと進んでいく形式をとっていることである。

第2の天文学的な要素について見ると、皇太子アーサーが大熊座のアークトゥルスに喩えられ、彼

は主星である北斗七星という黄金の戦車に乗って太陽の領域を駆けめぐっていた。キャサリンは小熊座のヘスペルスに喩えられている。またアーサーとキャサリンは、それぞれアークトゥルスとヘスペルスを天空における住居としてと考えられていた。このように人間の魂が、それぞれ特定の星を住居としているという考え方は、遠くプラトンの著した『ティマイオス』まで遡ることができる。またアーサー王伝説においては、アーサーは死後、西方楽土の Alvan に搬送されたことになっているが、15世紀後半以降になると、John Lydgate が著した Fall of Princes (1430-8) にも見られるように、彼はアークトゥルスへと昇天していったと読み替えられるようになり、ケルト的なものからよりキリスト教的な理解がなされるようになっていた。もちろん皇太子アーサーは、アーサー王がアークトゥルスから地上界へと降臨し再来したものと考えられた。また見逃してはならないことは、キャサリンとアーサーの関係が対等な関係ではなかったということである。すなわち、ヘスペルスは太陽の光の下で、その輝きを失っていく運命にあるのであり、アークトゥルス (アーサー) の援助なくしては、名誉の御座まで到達することはできなかった。つまりこのページメントはキャサリンを主役に据えながらも、実のところ、この結婚があくまでもアーサーが主であり、キャサリンが従であるということに慎重な配慮がなされていたのである。

第3のキリスト教に関わるアレゴリーには、教父学やスコラ哲学のテキストからの引用が見られる。たとえばアーサー (=アークトゥルス) の七つの星の解釈にヨハネの黙示録やグレゴリウス一世の著した Moralia の解釈が用いられていることで研究者の意見が一致している。キャサリンは第2ページメントでアークトゥルスの七つの星が、七主徳を象徴していることを知る。また月の領域においてヨブはそれらが、the Holy Spirit の七つの賜物を象徴することを示した。さらにヨハネの黙示録では、七つの星が the seven-branched candlestick で象徴されるアジアの七つの教会を見守っていたが、第5ページメントにおける主の御座の前で、アーサーの七つの星は seven-branched candlestick として

the Church Universal を守護していた。こうしてアーサーは教会の守護者にして完全なるキリスト教騎士となるのであった。

第4の要素はこの凱旋入市式の主題である the Honour に関するものであり、その解釈についてはキプリングの解釈が注目に値する。確かに国王が戦いに勝利し凱旋した際に、ページェントのモチーフとして「名誉」が用いられたのはこの時が初めてではない。しかしながら、キャサリンの場合に用いられた「名誉」は次の点でルネサンスの新たな意味合いを吹き込まれていた。すなわち、これまでの凱旋入市式では、都市側が統治者として必要な美德を提示することに重きが置かれていたが、ここではさらに一歩踏み込んで、キャサリンという個人をページェントの主演に据え、美德を身につけ名誉の御座に座した彼女の栄光を讃えている点である。このように特定の個人の栄光を讃える形式は、16世紀後半のイギリス・ルネサンス期に盛んに用いられるようになる凱旋や名誉の概念を予見させるものでもあった。彼はこのテーマの基となったのが、当時ブルゴーニュ宮廷で最も著名な作家ジャン・モリネットの著した『名誉の御座 (Le Trosne d' honneur)』であったと考える。これは1467年に亡くなったフィリップ善良公の死を悼む哀歌であった。フィリップは死後、名誉の玉座に向かって昇天していく。その間に九つの領域が設定されており、それぞれに PHILIPPVS の一字が割り当てられていた。さらにそこには九つの美德と騎士の美德が立っていた。彼の旅路の最終地点には名誉が御座に座しており、その両脇には二つの黄金のシャリオットが用意されていた。一つはフィリップ、もう一つは彼の息子シャルル勇胆公のものであった。その過程でフィリップは騎士道の完璧なる模範者たるアーサー王、ならびに Charles His Waive (北斗七星) として正義の領域 (Dame Justice) を統治していたシャルルマーニュに邂逅したのである。キャサリンの凱旋入市式における皇太子アーサーの役柄の設定も、フィリップがアーサーとシャルルマーニュに遭遇するこの場面に大きく依存していた。すなわちアーサーは北斗七星からなるシャリオットで天空を疾駆することで、キリスト教的騎士と正義の両方の資質を兼ね

備えることになったのである。

王の儀礼としての凱旋入市式のその後の経緯であるが、宗教改革の洗礼を受けて以降も、それは衰退するどころか、ますます発展していった。16世紀後半のエリザベスの治世ともなると、古代ローマ風の凱旋門やシャリオットが本格的に用いられるようになり、凱旋入市式が、より厳格に古代の形式に即して行われるようになったのである。また16世紀後半以降に「ロンドン市長の入市式 (Lord Mayor's Show)」が盛大に執り行われるようになるが、この時にも同様の凱旋式が用いられるようになったことも注目に値しよう。また「名誉」の概念も、当代のイギリスの著名な作家たち W. シェイクスピア、T. デッカー、B. ジョンソン、T. ミドルトンらが好んで用いたテーマでもあったのである。

おわりに

では最後に今回扱ったキャサリンの凱旋入市式の意義について、共通テーマである儀礼と権力という観点からいくつか考えてみよう。

すでに述べたように王の入市式におけるページェントの中に、都市側から王へのメッセージないしは彼らなりの王権のイメージが示されていたと考えてよい。名誉の凱旋のページェント全体を通じての共通テーマは「七つの枢要徳に基づく名誉の獲得」であり、これこそ王が国家を統治する際に身につけるべき資質であるということが強調されていた。また七つの徳、七つの教会、七つの蠟燭、北斗七星と数字の七が重要な意味を持って登場することも興味深い。このようにモラルの獲得を国王たるに重要な資質とする考え方自体は、すでにヘンリ六世のページェントの中にも現れてくる。その意味でこの凱旋入市式の中に中世以来の伝統的要素を読みとることも可能である。しかしながら、新たにルネサンス的要素がその中に加わっていることが、より注目に値する。たとえば古代ローマの凱旋式が用いられたことは、これまでのキリスト教的要素と新たな古代ローマ的要素の融合を示すものであった。あるいはアーサーに焦点をあてれば、キリスト教的騎士と古代ローマの凱旋將軍の融合とも言えるであろう。さらに、ページェントと国王の関係について見ても、

従来のように単なる観客ではなく、キャサリンとアーサーをページントの主役に据え、彼らの個人的栄光を讃える形式に大きく変化した点などにもよく示されている。

では、こうした凱旋形式の入市式を、少なくとも当時の知識人層が、カエサル時代から始められた古代ローマ帝国における祝祭形式であるということをはっきりと認識していたとするならば、彼らはさらに踏み込んでチューダー王朝の諸王を皇帝とみなしていたのかという問題がにわかには生じてくる。確かにヘンリ八世治世に制定された宗教改革に関する制定法の条文の中にも、EmpireやImperialといった記述が認められる。たとえば1534年に制定された有名な「国王至上法」においても、我が主権者たる王は、Anglicana Ecclesiaと呼ばれるイングランド教会の地上における唯一の至上の長であり、また王国のImperial crownを備えているといった記述が見られるのである。また1522年6月に神聖ローマ帝国の皇帝カール五世がロンドン市に入場した際のページントでは、シャルルマーニュに扮した役者がヘンリとカールのそれぞれに剣とimperial crownを献上している。ヘンリはこの時、Tudor imperiumがアーサー王を通じてコンスタンティヌス帝に由来するものであることを盛んに強調し、カールをわざわざウィンチェスター城まで連れ出してアーサーが用いたとされるRound Tableを見せるという熱の入れようであった。ただし、ここで用いられているImperialのより正確な意味については、慎重に考えてみる必要がある。たとえば、1559年にジュエル主教は英国国教会を公式に弁護して次のような興味深い議論を行っている。かつては皇帝が教会の会議を招集したものであるが、これは「いまやすべての国王に普遍的な権利となった。それは国王がImpireのどの地方もまったく自分の所領としているからなのだ」と。つまりこの時期のImperialとはあくまでも主権国家という領域をでるものではなく、国王はあくまでも「王国内の皇帝」であった。少なくとも、いわゆる大英帝国の建設を宣言したものではさらさらなかったのである。

最後に考えてみたいことは、チューダー王朝を絶対王政と呼べるのかという問題である。この問題は、

何をもって絶対的と規定するのかに関わるが、仮にそれが何者からも制約を受けない絶対的な権力を獲得し行使しえたという意味なら、チューダー王朝の諸王にはあてはまらない。確かに主権は国王並びに王族に属し継承されたことは事実だが、一方でイングランドでは早くも15世紀にJ.フォーテスキューを通じて王政と共和政を併せ持つ混合政体論が現れ、それはイングランドの政治社会の中でずっと共有されてきた政治理念であった。またかつて「チューダー行政革命」と評されたように、中央行政機構の拡充は見られたものの、地方統治は依然として在地の貴族・ジェントリに依存せざるをえない状況にあった。このようにチューダー王朝の権力構造の分析は、国王がいかにか絶対的な権力を獲得したかではなく、王国内の様々な社团的団体といかなる政治的・社会的関係を取り結びながら政治的安定を維持しえたのか、そのメカニズムの解明に向かっているといつてよい。しかしながら、王権の至上性、絶対性を王の権威という観点から見直すならば、チューダー王朝時代にそれは著しく高まり、政治的統合の象徴的機能を果たすようになったといえる。本稿でも明らかにしたように、国王は様々な儀礼を通じて、アーサー王やシャルルマーニュ、さらには古代ローマの皇帝との血縁関係を強調しながら自らの王権の正統性を誇示し、またアングリカニズムという独特のキリスト教との連携を保ちながら、自らの聖性、超越性を高めていったのである。この時期にルネサンスの諸芸術が、入市式を初めとする儀礼の中に積極的に取り込まれていったことで、王権の審美性や荘厳さは一層増すこととなり、人々はそこに様々なレヴェルで王権の至上性、絶対性を感じ取ったのである。もちろんこうした王の権威も、政治社会の安定を維持し、政治社会内部において確実な合意を取り付けて初めて成立するものであることは言うまでもない。いずれにしても、この時期にあえて絶対王政という概念を用いるとすれば、以上の点を了承した上で用いる慎重な配慮が必要であろうと思われる。

(付記) 編集部の方針により、本稿では註を付さないことにした。このチューダー王朝時代の凱旋入市式の問題は、別稿にてあらためて論ずる予定であ

ることを付記しておく。
